
世紀を越えて逢いにゆく

霧友 亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世紀を越えて逢いにゆく

【Z-ONE】

Z0277BA

【作者名】

霧友 亮

【あらすじ】

【2012文字小説】君がいなくなつてから、もう七年近くが過ぎ去った。僕だけが覚えている君に、いまこの言葉を贈る。

どうして僕だったのだろう、と思つ。君がいなくなつてから、もう七年近くが過ぎ去つた。

『世紀を越えて逢ににゆく』

～一〇一一年、僕のコイと君のコイ～

突然、未来から来たという君。

この時代の少年を不幸な未来から救うのだと黙つて、気付けば当たり前のようそその姿があつた。青い達磨のような姿で、耳もないのに「ぼくはネコだ」と言い張る君。いつもお菓子を食べたり、マンガを読んだり……要するに、遊んでばかりいるように見えて、実は一年三六五日、皆の幸福のために頑張つていた。

空を飛んだり、ハイキングへ行つたり。見たことない未来道具で楽しませてくれた。

僕を、未来に連れて行つてくれたこともあつたよね。その代償は、なかなか大きかつたけれど……。別に恨んでるわけじゃないんだ。可愛い妹さんにも会えたし。今が停滞していても、未来には希望が持てるつて。いつか僕らがその未来を作るんだって、子供心に強く思つたんだ。……一緒にいた彼はどうか、知らないけどね。

いつまでもそんな日々が続くのだと。終わらない子供時代に揺蕩うのだと。

そんなことが、ある筈もないのに。僕らは疑つてすらいなかつたのだ。

だけど、あの夜。君は僕に会いに來た。

いせなりで「めん、
と。」

突然、その丸い頭を下げる君に、僕は眼を白黒させただつけ。時間が立ち過ぎて、君が僕を何と呼んでいたのかは思い出せなくなってしまった。でも、あの時の雰囲気と。君の表情は、よく思い出せる。

いつもの君とは、あまりにも雰囲気が違う。でも、そこにいるのはいつも、優しくて皆のことが大好きな君。 ヘンテコな道具で僕達を楽しませてくれる、いつもの優しい君だった。

自分のカンの鋭さを、その時はビ恨んだ」とはない。

未来に、
帰るんだね。

そう返した僕の言葉に、君は驚いたように眼を見開いて。それから。泣き出しそうな笑顔で、頷いたんだ。

六
六
六

航時法が変わって、過去の世界への干渉が禁止されたんだ。

みんなに話すと引き止められちゃう。だから、今晚いひそつ帰る

いつか時が来たら、からみんなに話してあげて。

翌日。宣言通り、君のいない毎日が始まる。
五つの輪の一つを失つて。皆、記憶も失つていた。
いじめっ子のガキ大将、超絶な音痴で皆を困らせる彼も。

大金持ちの小心者、モノでしか自分の価値を確かめられない彼も。優しくて優しくて、それが故に残酷な一面を持つ彼女も。そして……君と誰より固い絆で結ばれた筈の彼までも。君について尋ねる僕に、口を揃えた。

誰だよ、それ。

知らないなあ。何かのマンガ？

大丈夫？ 保健室行きましょうか？

だあれ、それ？

酷いや、と思った。

誰も知らない。誰も傷つかない。ただ、僕を除いては。もしかしたら君は、誰かに覚えていてほしかったのかもしれない。でも、彼らには何にも言えなかつた。近過ぎて、君自身が抑えられなくなるから。

自分に言い訳をして。良心を誤魔化して。ありえないことに期待して。

きっと、「なら大丈夫」だなんて。そんなことを考えたんじやないのかい？

ああ、ならば。こいつ言つしかないじゃないか。

僕なら大丈夫。

君達の美しい思い出を、僕はずつと抱えて前に進める。「大人だから「なんかじゃない。僕だって彼らと同一年だ。ただ、思いを隠す術を知っているというだけ。だって、僕はずつと隠してきたから。

僕はきっと、恋コイをしていた。

君達の、オリンピックの五輪よりも堅い絆に。

ガッチリと組み合わさって、何が起きようとも壊れない。そんな君達の絆に、きっと僕は憧れて。もしかすると、羨んでいたんだ。

* * *

乱暴だけど、仲間思いで誰よりも頼りになる、リーダー格の彼も。皮肉屋だけど、見えない所で悩み傷つき、誰よりも努力する彼も。潔癖症だけど、皆のために身を捧げ、誰よりも強くあろうとする彼女も。

そして。誰よりも愚かしく、それがゆえに誰よりも純粹で優しい彼も。

皆が君を忘れている。彼らの航路は少しづつ離れて、互いを「過去」の箱へと移し始めている。

その表情に、どこか陰を見て取つてしまつのは、僕のHIGIだらうか。

こんな結末を、君は望んでいたのかい？

僕は、認めない。君を引き摺り戻しても、その本心を確かめやる。

文句は言わせないよ。僕だけ記憶を残したのは、君の「未必の故意」なのだから。

一つの輪が離れ。君達は一見、バラバラになつた。

でも、大丈夫。世紀を越えても、僕が君たちを再び巡り合わせる。

静かな決意と共に、僕は開いていたロボット工学の専門書を閉じる。これから、決して楽ではない日々が始まつだらう。傍らのノートには、今となつては面映い己の名。

この名に恥じぬ、「英才」ならば、「出木杉」な未来を、きっと掴み取つてみせる。

一一一九年九月三日。君が生まれるまで、後一〇〇年。

(L)

(後書き)

作中に固有名詞は1人しか出しませんでしたが、……それぞれ誰のことか、お分かりいただけたでしょうか？

この作品は、現在参加の申し込みをさせていただいている那音様主催『2012文字』企画向けに書き下ろしたものです。

ですが、

- ・恋愛じゃないじゃん
 - ・二次創作じゃん
 - ・希望つづうか決意じゃん
 - ・今すぐに公開したい
- との思いから、企画とは別に公開させていただくことにしました。もし企画参加に承認をいただけましたら、年が明けてから別の作品を改めて書き下ろしたいと思います。

『ドラえもん』は私が最も好きな作品で、私の人生のほとんどを決めていると言つても過言ではありません。

いま、創作をしているのも、

リアルで取り組んでいることでも。

全て、藤子先生の『ドラえもん』あつてのことなのです。

「2012年」の作品、と考えたとき、真っ先に『彼』が生まれる100年前だ、といふことが思い浮かび、このような作品になりました。

1人称がのび太ではなく彼になつたのは、創作に携わる者としてのちょっとした意地でしょうか（笑）
5人組の外にいて、彼らを一番冷静に見ることができる人。
それでいて、時に「6人目」となる人。

それはやつぱり、この作品で一人称を務める彼ではないでしょうか。
『ドラえもん』にあまり詳しくない方で、他のモブキャラは知らなくとも、恐らく彼については一度は耳にされたことがあるのではと思ひます。

こんなの『ドラえもん』じゃない、と思われる方もいらっしゃると思ひます。その方には、先に「申し訳ありません」と謝らせて頂きます。

私では、まだ完全な『ドラえもん』の世界は書けない。
その自覚はあります、それでも今、これを私なりの『ドラえもん』として掲げたい。

いつか、胸を張つて、藤子先生に捧げられる作品を書くために。

なお、『彼』がいなくなつてから7年としたのは、別に私の年齢が云々ではありません。

『ドラえもん』にとって、2005年は大きな激動の年でした。
私も大きな衝撃を受け、それがご本人達の望まれたことと分かっても、未だ割り切れぬモノを感じています。

今、『ドラえもん』は次の世代に渡された。

彼らには彼らの『ドラえもん』があつていいと思います。
でも、私は旧世代の、僕らの『ドラえもん』と一緒に歩いていきたいのです。

今でも、私の心の内側で生きる彼らは、やつぱり「あの声」です。

僕らにとつての『彼』は未来に帰つた。そう思つています。

100年後の人々が、『彼』に会えるように。

彼に自分の思いを重ねるのは、正直非常に恐れ多いのですが……。
お許しをいただければ幸いです。

皆様が、良い年を迎えられますように。

2011年 最後の日。

霧友亮

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0277ba/>

世紀を越えて逢いにゆく

2011年12月31日19時52分発行